

## 周辺からの記憶 23

2015年12月 シンポジウム

東日本家族応援プロジェクト5年を振り返る

村本邦子（立命館大学）

今年は潜伏キリシタンに関心を持って、あちこち足を延ばしている。1月には天草、2月には長崎、島原、そしてGWには五島、外海、平戸へ行った。多くのことを感じ考えさせられているが、本連載との関係で言えば、浦上に原爆が落ちたことを「浦上五番崩れ」と呼んだことが強く印象に残る。「崩れ」とは、潜伏キリシタンが摘発・処罰されることを言い、とくに「四番崩れ」、禁教令が解かれる直前に起こった大規模一斉検挙と総流罪の後、生き残った信徒たちが帰村し、三十年の歳月をかけて東洋一の浦上天主堂を建てた。1945年、原爆によって天主堂が破壊され、信徒の八割が犠牲となった時、これを「五番崩れ」、すなわち五回目の試練であると捉えたのだ。つまり、自分たちのコミュニティが苦難を乗り越えてきた歴史の記憶は、再度大きな苦難に直面した時、それを乗り越えようとする力になるということだ。

フロイトは、一切の問題をある上位の一仮定から統一的に解決する知的構成物を「世界観」と呼び、「世界観の所有は、人間の理想願望に属し、それによって、人間は人生に安心感を得、何を目指して努力し、どうすれば自分の情熱と関心を一番目的に適うよう投入することができるかを知る」とした。彼自身は、宗教は科学的世界観に対抗する発達的に低次な基盤と考えたが、フロイトにとっての科学、そして遺作である『モーセと一神教』は、ナチスドイツ下で精神の自由を維持して命を全うしようと戦い抜いたの男の一種の世界観構築だったと私は捉えている。



そういう意味で、東北各地の人々の世界観に関心がある。先祖代々受け継がれてきた価値、自然との折り合いのつけ方、人災や悪意への対処など。宗教というよりは、スピリチュアリティと呼ぶのが良いかもしれない。

◀写真は五島の頭ヶ島天主堂



## むつから

むつ市立図書館から「団士郎家族漫画展」の構想が生まれ、東日本・家族応援プロジェクトが生まれた。当時の自分はむつ児童相談所で児童福祉士になったばかりで、定期的に団先生の漫談を聞きながら、児童福祉士として成長させて頂いていた。2011年に団先生をむつ市に招く機会があり、むつ市立図書館にお連れしたところ、団先生が、ふと「ここで漫画展やりたいな」と仰った。その二ヶ月後に3.11だった。

あの日は青森市の山奥に開設されたばかりの情緒障害児短期治療施設で、入所児童と面接をしていた。面接を終え、椅子から立ち上がろうとしたところで、揺れがきた。慌ててロビーに出たら、すでに入所児童たちが集まって点呼をとっていた。安全確認して山を下り、帰路に着いたが、途中、信号が真っ黒。それが地震による停電だと理解したのは、市街地に入ってからだった。車載テレビで実家のある八戸の漁港が呑み込まれる状況を見ながら、静かな陸奥湾をバクバクしながら帰った。

青森県の被害状況は、死者が八戸で1名、三沢で2名、計3名。行方不明者が八戸市で1名、負傷者が18名、軽傷者77名、計95名。岩手、宮城、福島に比べれば、人的被害は比較的少なかった。家屋の浸水や倒壊の被害も、同じ津波でも北に上るにつれ、破壊的に押し寄せるというより、じわじわ湧いてくるような感じなので、1階部分は浸水して中のものが流されても、2階はそのまま原型をとどめている

家屋がほとんど。重いコンテナが華奢なフェンスの上に載っていたり、大きな船が建物の寸前まで来ていたりというような状況だった。

そんななかで、むつ市の被害状況は、人的被害0、家屋の倒壊0。直接的な大きな被害はなかったが、4月7日にもう一度大きな地震があり、しばらく停電が続いた。その時、不安を抱えたお母さんや発達障がいのお子さんの相談が出てきた。単純に地震の影響とは言えないかもしれないが、箱庭療法で山を作っては崩し、港を作っては波を起こして飲み込ませるというのを何回も繰り返し、やがて工事車両を入れて、最後には港、畑、山、川を綺麗に復興させ、気がつく学校での問題行動も落ち着いていたというようなケースもあった。

むつ市はその地形から海上自衛隊大湊基地や航空隊のレーダーが配され、昔から北の砦として軍港で栄えた土地である。市民の多くは少なからず自衛隊に関係し、人の出入りがあるので飲食店も成り立ち、インフラ整備も整ってきた歴史がある。あの日、地震発生からわずか11分で、どこよりも早く海自の被災地沿岸にヘリコプターが飛び立ち、素早く現地の状況を把握したということは市民の誇りでもある。その後も続々と被災地に出向いていた。地獄絵図のような現状を見た海上自衛隊の隊員たちがいたことは、少なからず家族にも影響したと思う。

下北半島には原発関連施設があり、福島の事故は決して他人事ではなかった。残された家族は、余震があるたびに被災地で働く家族の安否を心配し、停電の暗

闇で心細い時を過ごした。ガソリン不足、テレビのコマーシャルは来る日も来る日もポポポーン、番組は被災関係ばかり。原発関連工事が中止になったため、お父さんたちの失業、被災地への出稼ぎ、そして風評。もちろん日本中が同じ状況で、「泣き言は言えない、被災地の人たちはもっともっと大変な日常を送っているんだ」と、大人のストレスはそのまま子どものストレスになり、家庭基盤が弱いところからほころびが出てきた。

新年度の業務が始まり、団先生の言葉を思い出し、「こんな時だから漫画展やりませんか」とメールしたが、返事がないまま、日常業務に追われていた。6月1日、突然、返信があり、家族の練習問題特別版を作って被災地の幼児教育機関に無償配布するという提案があること、大学の被災地復興支援プロジェクトの多様展開の一つとして、漫画展と地域での講演やワークショップをする案があるという話。京都の有名私立大学の名立たる先生方が無償で本州の最果てまで来てくださると、大慌てで上司に伝え、即決でやる方向だけは決まった。それから間もなく、主催者である村本先生との打ち合わせが始まった。

企画を受け、私たちの地域は直接的な被害はなかったけれど、だからこそ元気な地域からの発信ということで、サブタイトルに「東北のてっぺん下北半島から災害復興を」と掲げて、実施要項を作成した。当時の所長や同僚の後押しがありがたかったと、今も振り返って思う。こんな形で列車は発進し、同時進行で様々な準備を急ピッチで進めた。当初地域の

機関は冷ややかだった。ひとつひとつ説明し、後援という形で市の施設を無料で使用させてもらうことになった。

2011年9月、記念すべき第一回の団士郎家族漫画展は月曜日から土曜日までの6日間だったが、回を重ねるごとに増え、今年は3週間になった。考えられる限りのPRはしたが、たまたま図書館を訪れて、なんとなく覗いてくれた方がほとんどだった。ところが、見た人の感想はどれも新鮮な驚きで、「木陰の物語」の配布も大変喜ばれた。その他の企画を合わせ、参加者95名、アンケートは「とても良かった」が80%、「良かった」は20%で100%だった。

2年目の目標は地域に根差した地域の事業として継続させること、転勤のある県機関で継続させることを考慮し、初回は後援だったむつ市と教育委員会の協賛団体として加わってもらった。共催機関で実行委員会を立ち上げ、2011年の実績をたたき台に意見を出し合い、協働することで、日常的な業務、例えば要保護児童対策地域協議会や実際の日常業務でも連携しやすくなったという副産物を得た。これで地域の基盤はとりあえず出来たかなと実感した2年目だった。

3年目は中央児童相談所に転勤になったが、後任に引き継いで実施され、4年目は課長としてカムバックし、再びメンバーに加わった。この年、就任したばかりの若き市長も駆けつけてくださり、5年目も無事終了した。続けることで何が見えてくるか、どんな効果があるか、今も手探りの状態。地域の関係機関と一緒にやって作り上げるという作業は、日常の業

務においても顔の見える連携という大きな副産物が生まれている。

折り返し地点に立った今、被災地でないむつ市におけるこのプロジェクトの効果として、復興とは震災に限らず、形の上で元通りに復元するのではなく、再び起きた時にどう受けとめて、どう乗り越えるか、その力を培うこと、そのための家族力アップこそがこのプロジェクトの狙いなのだということが、少しずつ理解されるようになってきたということだと思ふ。今後の課題として、11年目の状況、立命館が蒔いてくださった種を地域の力でいかに根づかせるか、残る5年で何ができるか考えながら、来年に向かいたい。



## 多賀城から

多賀城市は宮城県のほぼ中央、仙台平野の東側に位置し、伊達政宗で有名な青葉城址のある百万都市の仙台、マグロの水揚げ漁港、水揚げ日本一の漁港を抱える塩釜市に隣接する小さな市である。人口は約6万2千人、県内第二の人口密度となる。

東日本大震災では、マグニチュード9.0、震度5強の震度を観測、津波被害が甚大で、仙台港付近では約7メートルの津波が襲来した。浸水区域は662ヘクタール、市全体の3分の1が津波にあい、壊滅的な被害状況となった。数千台の車が折り重なるように流され、仙台港から貨物列車のコンテナや有害物質を含むドラム缶が何百と流れてきて、国道や県道を塞いだ。

瓦礫を取り除かなければ災害支援の車や物資が多賀城市内には入れないという酷な状況だった。加えて、電気、ガス、水道のライフラインが数週間にわたり停止。店もガソリンスタンドも空かず、夜は暗闇の世界、1日に何十回も発生する余震と、それまで経験したことのない壁を必死で登りながら頑張った。

4年半が過ぎ、急速に復興が進んでいるが、私たち自身の経験や教訓を風化させることなく未来に継承し、語り継ぎながら復興のあゆみを進めている。立命館大学の皆様との出会いも含め、たくさんのつながりや絆に支えられながら、これからも復興に向かい、未来に向かって歩んでいきたいと思っている。

東日本・家族応援プロジェクトとの出会いは、3年前に開催した図書館講座に山形大学の上山真知子先生を講師にお招きし

た際、団先生の『木陰の物語』とプロジェクトをご紹介頂いたことだった。感動したのは十年間継続して行う事業だということ、本当に驚きだった。一個の点ではなく、点と点を結んで線にしていく、道のないところに励ましの道をつくる、本当に素晴らしい心の応援プロジェクトだと当図書館館長も絶賛していた。

多賀城市立図書館でプロジェクトを開始したのは2013年度からだ、今年度は図書館が駅前の再開発ビルに新築・移転するため、建築工事が進んでおり、現在の図書館で実施されるのが最後になる。例年以上に図書館、地域、立命館大学の皆さんが一体となるような企画にしたいと決意した。それで、「お父さん応援セミナー 絵本でボイスパフォーマンス」を企画した。お父さん向け講座は図書館初の試みで、予想通り参加者は少なめだったが、最後に「あたりまえのこと」という詩を輪読し、企画して本当に良かったと思える感動に包まれた。

次に、三部構成の「家族応援お話し会」で、多賀城民話の会の皆さんによる地元の民話の紹介の後、多賀城市立図書館長による「パンダはなぜ可愛いのか」という手作り紙芝居を披露、場内が笑いでいっぱいになった。津波に流された館長の車の中にあっただもので、2カ月後に全く濡れず、手元に戻ってきたという奇跡の紙芝居だった。最後は、地元のボランティアグループ、カンガルーの皆さんによる読み聞かせと手遊びだった。

午後は団士郎先生の漫画トークで、初参加という方から三年連続参加という方まで。仙台から来られた一人との女性との思

わぬ出会いもあった。子育てに行き詰まりを感じていた時に団先生の漫画に救われたようで、セミナーが終わるなり、団先生に駆け寄り、その思いを伝えていらっしかった。団先生の漫画展やセミナーは多くの人に語りかけるものでありながら、距離感のない懇話的な要素があり、また、継続的に行ってきたからこそ、こういう出会いがあるのだと実感した。多賀城市立図書館における漫画展の開催期間は一カ月なので、多くの機会に見てもらえると思う。

今後はこのプロジェクトを含め、震災を風化させることなく語り継ぐことが使命だと思っている。時間経過とともに忘れて行くのではなく、人に寄り添い、家族に寄り添い、コミュニティに寄り添って人々が復興の物語を作っていく声に耳を傾けますというプロジェクトの趣旨を継続し、考えていきたい。それが地域の活性化につながれば幸いなことだと思う。多賀城市立図書館は、来年度から指定管理業者に運営が任せられることになっており、今後ますます地域での広がりがあるのではと期待している。力を結集して取り組んで参りたい。



## 石巻から

ライオンズクラブ国際協会に所属しているが、あの日を境に大きく様が変わってしまった。石巻市は広さが555キロ平米、ちょうど神戸市と同じぐらいで、その6割が田んぼと山と畑というようなところ。実は2日前にも大きな地震があって避難し、また来たということで、職員の命をなくすことなく避難することができたが、そこからのスタートが大変だった。まず、街中の小学校だったのに、自衛隊も消防も警察も誰ひとり来てくれない。電気も水道もないなか、3日目の朝、やっと自衛隊が来てくれた。後から聞けば、沿岸部の救命に走り回っていたわけだ。我々は民間の任意団体なので、少しずつ全国から支援が入り、物資の受け入れや配給などボランティア活動に取り掛かっていた。

仮設住宅が出来たのは7月で、最終的には11月9日まで、小学校の体育館などで避難所生活を余儀なくされた。当時金沢工業大学におられた増田先生が絵本とジャズの取り組みをしたいということで、石巻の場合は、行政がこういうものを受け取って何かやるということは、まずあの当時はできなかったもので、何とかしようということで、ご縁を頂き、最初は小学校や私たちが作った沿岸部の子どもハウスでやったのがスタートだった。

2011年9月だったが、よそから人が来て何かしてくれるということは初めてだった。こんなところまで来てくれてありがたいというのと、これがどう復興につながるんだろうかと漠然とした印象だった。その後、繰り返して来てもらうなかで、8代のお

ばあちゃんが、子ども達に絵本を読んでやったことを思い出したり、お母さんたちが自分の母親に読んでもらったことを思い出したりと、思い出にふけることができるような時間を持つことができたことに気づいた。

あの震災が起き、地域の中では、当時、生きていたことだけが素晴らしいことだった。石巻市だけでも16万のうち4千人ぐらいが亡くなってしまっていたような時だったので、過去を振り返るとか、楽しい話をするとかいうことはできなかった。心のケアの関係で、災害が起きた時、一度気分が高揚して何でもできるが、そこから今度はドーンと落ちてしまって、そこから戻る期間が大切なんだという話を聞いた時に、絵本と音楽のこの取り組みは、一度高揚した気分が落ちてしまった人たちを少しずつ元に戻していくための一つの手段として非常に効果的だなというふうに思うようになった。

まもなく5年が経つが、今ボランティアとして入ってくる人たちは、当時に比べると百分の1以下に落ちている。地域では継続して活動している団体はあるが、こんなふうに離れた遠隔地から東北を見て頂いていることは、非常に寛容なところだと思っている。自分たちのことは忘れられていない、考えてもらっていると思うと、すごく元気が出る。勇気も出て、生きる活力になる。是非、来年度以降も継続していく中で、東北の復興の一つの力添えとなって頂けたらと思う。

今、国からの予算がたくさん入り、既に数千兆円落ちているが、うまく予算執行をやっていくことが難しい状況にある。漁港

改修といっても、業者は100社ぐらいしかないのに、改修するところは1,000カ所も2,000カ所もあって、順番待ちだったりする。そういう中で、今、地域の人たちは自立再生を目指して頑張っている。決して国がやってください、立命館の皆さん、やってくださいというスタンスではない。一生懸命頑張ります、仕事をします。でも、真に皆さんが自立再生していくためには足腰が弱い。何が足りないかというところ、よその地域からの「大丈夫なの、頑張っているの？」という声、具体的に来て頂き、働きかけをして頂くことだと思う。是非今後ともこの活動を続けて頂き、ライオンズクラブもできる限りその窓口となって、色んなお手伝いをさせて頂きたいと思う。



## 宮古から

岩手県の沿岸地方では比較的大きな法人で、障がい者や高齢者の福祉サービスを展開している。宮古市は本州の最東端と言われ、その時、私たちは利用者さんを連れて必死に逃げ、避難所で2晩、3晩と過ごし、ラジオ放送を聴きながら、自宅もない、家族もダメかとも思いながら、利用者さんを置いて家の方に行くこともできず、1週間ほどの記憶は曖昧である。津波が宮古市に来たのは3時26分、高さは8.5メートル以上と言われているが、実際には陸地を駆け上って到達した津波の高さは、一番高く40.5メートルと言われている。死者数は474人、現在も94人の方が行方不明。

ということで、東日本・家族応援プロジェクト以外にも立命館大学の皆さんにはいろんな形で宮古市に関わって頂いている。理工学部の建築都市デザイン学科、宗本先生にもお越し頂き、「おでんせ」という集会所も作って頂いた。記憶の街ワークショップの展開はじめいろんな形で支援してもらっている。

自分たちは去年から取り組み始めたが、きっかけは、高齢者アクティビティ開発センターさんの紹介だった。東京おもちゃ美術館の多田千尋さんと村本先生に交流があるというところから、宮古でもやってもらえないかというところからスタートしたが、最初はどう進めていいのかと結構戸惑った。まずは自分たちにできることからと、障がい、高齢分野で福祉サービスを展開している我々の実践から手探りのスタートを切った。

宮古市は会場の確保が非常に難しい。家

族漫画展は市内の商店街で、他の事業は宮古市総合福祉センターを借りている。「アートで遊ぼう」は、院生の皆さんとのコラボ企画ということで造形をやったり、「フラワーアレンジメント」というところでは就労移行支援の方で複数の企業と関わる機会があるので、障がいのある方と一緒にやる中で彩を持たせることができたらと取り入れた。準備についても事業所スタッフだけでは難しいので、障がいのある方にも手伝ってもらっている。

2年目の今年は、前回の反省を踏まえて会場を固定し、道の駅シートピアで開催した。買い物に来る人が立ち寄れるのではないかと考え、広報の部分でもチラシの配布を拡大し、福祉関係の方にも広く声をかけた。鶴野先生のつながりで、地元の歴史や民話を知っている方を紹介頂き、支援者向け研修というところでは村本先生にご協力頂いた。障がいのある方が被災して、避難所生活、仮設住宅、そして災害公営住宅という形で生活されている方のケースをどのように支援していったらいいのかということで、ケース検討を行った。

スタッフとも2年間を振り返ったこととして、せっかくやるからには、少しでも色々な方を巻き込んで、多職種と連携して進めていきたい、そのための工夫を引き続きやっていかないといけないという部分で、これは本当に私たち事業所の課題である。支援する側と参加者と我々との温度差も考えていかないといけないと感じている。

避難生活の記憶は、自分も忘れかけているところがあるが、被災地と言われている場所が逆に非被災地とからどんな風に見えるのか、自分たちは復興に向けて進

めている部分しか視野が狭く見えなくなっているところがあるので、そういったところを逆に教えていただくとか、そういうことができればいいのかなと感じている。あとは、受援力を高めて行くことの必要性を上司が言っていた。今回の震災で色々な支援者が来てくれたが、大変嬉しい部分もあるが、最初の頃にはボランティアが一気に殺到し、支援を受ける側も疲弊してしまうところがあった。

4年が経過してということで、宮古市社会福祉協議会さんの生活復興支援センターさんに現状を伺ってきた。被災地の状況も変化してきている。最近だと災害公営住宅ができ、そちらに入居された方もいるが、まだまだ仮設住宅での生活をしている方、みなし仮設で引き続き生活されている方、あとは新しく家を建てて新しい地域で暮らし始めている方と多様で、宮古市社会福祉協議会さんが中心となって関係機関と連携しながら支援をしている。

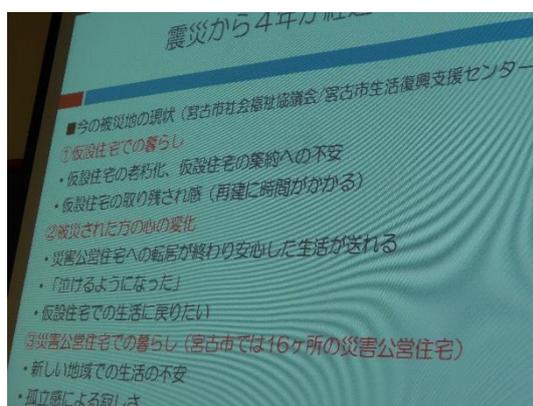
仮設住宅の暮らしも4年になると、住宅が老朽化し、地域によっては空いているところも出てきているが、それらがどういった形で集約されていくのかというところで不安を感じていたり、どんどん再建していく人がいるなかで、取り残され感を持つ方が増えてきているということだった。

被災者の心の変化というところでは、公営住宅に転居し、安心した生活が送れているという方もあれば、時間が経って泣けるようになったという方もいる。仮設住宅での生活に慣れ、いろんな方との関わりができたところで、災害公営住宅ということで新たな地域に移り、逆に仮設住宅に戻りたい方々もいる。宮古市には16箇所、災害公

営住宅があるが、新しい地域での生活不安、孤立感、住民同士の集まる機会が減少しているというところでは集まる機会を作ったりもしている。

障がいのある方も、震災によって大きく環境が変わったが、逆に利用者さんの方が前向きだったりして、私も結構励まされて今まで4年間やってきたなというところがある。震災離職ということで、会社も運営することができなくなってクビを切られ、就労移行支援事業所に殺到するということが実際にあった。復興支援ということで泥上げだったり、瓦礫の撤去ということだったりということで障がいのある方が一生懸命復興に関わってきた経緯もある。その中で、支援される側から支援する側に利用者さんが変わることもあるんだと感じた。仮設住宅にお邪魔して、お茶を飲んだり作品を作ったりという企画を何度かやったが、被災された方も障がいのある方と関わることで笑顔になれるというふうに言うてくださることがあった。そんな取り組みをこれからも引き続きできたら。

むつ市のお話にもあったように、これだけの先生方が宮古市に訪れてこういう企画をしてくださるのは、なかなかないので、地域の方でも力を発揮していいものにつなげていきたい。会を重ねることで広がりもできつつあるので、どんどん続けていくことで、残り5年のところではなんとか発展的な取り組みができればいい。



## 福島から

福島は2011年から始まり、最初の年の二本松から関わっている。東日本大震災から昨日で4年9カ月だが、福島は、震災直後の津波と、地震そのものでの建物の倒壊に原子力災害が重なり、今なお影響が続き現在進行形である。

福島は岩手について都道府県の中で3番目に広い県。福島市は一番北にあり、プロジェクトを実施してきた福島市と二本松市は沿岸部からは70キロ、80キロ離れているが、意外と放射線が高い。ここから他県に避難されている方も多くいる一方で、沿岸部の市町村からたくさんの避難者を受け入れている。今年3月の情報だが、200万

人近くいる県の人口で、県外避難者は4万人、県内の仮設住宅等で生活している方も7万人いる。福島の場合、震災関連死が非常に多いのが特徴。仮設住宅等で家族が離れ離れになり、故郷そのものが失われ、避難が長期化する中で、心の問題や体の不調がでている。

福島県から全国に避難している方がたくさんいるが、若い世代、子育て世代の避難者が非常に多い。今一番多いのは、東京都、次に埼玉県、そして新潟県、山形県と続く。京都に避難されている方も実はたくさんいる。子どもだけで避難しているということはないが、家族離れ離れで避難するケースが多い。お父さんは元の場所で仕事して、子どもと奥さんだけは離しておきたいということで、離れ離れになって避難するケースが非常に多くなっている。

家族応援プロジェクトは家族を焦点にしているが、家族が震災の影響を直接的に受けてしまっている。家がなくなる、命がなくなるとかではないが、二次的、三次的に震災の影響がある。福島県内には仮設住宅がまだたくさんあり、復興公営住宅ができ、やっと入り始めたが、仮設は来年まで、再来年まで確実に残る。それぐらいのスケジュール感なので、震災から5年、6年経っても仮設から出られない方はいらっしゃる。それが長期化と言われるところの現状。

いわゆる自主避難者について言えば、2017年の3月で住宅支援は打ち切りになった。避難生活から故郷に戻ってくるとなれば、仕事のこと、子どもの学校、家族の生活スタイルなどまた色々動いていく。まだまだ動き続ける。

震災当初の仮設住宅で暮らす子どもや

家族のなかには、避難所を5カ所、6カ所移った方もいる。子ども達は転校を余儀なくされ、友だち関係もバラバラ。交友関係の断絶、家庭環境の変化。仮設住宅は狭いので、三世代で暮らしていたのが別になったり、お父さんと母子が離れる、兄弟でも年齢や学校の関係でバラバラになったり。親の失業もあった。賠償が出たケースもあるが、なかなか再建に気持ちが向けられなかったり、色々難しい。そんな両親の後姿を見ている子どもたちはどうか、難しい問題が出てきている。お父さんと離れ離れになり、月1回とか会いに来るが、お父さんが福島に戻るとなると、子どもが号泣する。

福島は様々な報道があるが、特に県外に避難されている方に復興の過程や放射線の現状が伝わらないので、震災当時の記憶や気持ちが出てきてしまう。アンケート等を見ても、県外避難の方が心の問題でもハイリスクになっている。福島に戻ろうかと考えても、友達や親戚との付き合いを断ち切って、子どものことを考えて避難した方は、それが取り戻せるのか悩んでいる。一方で、避難しなかった人たちも、放射線のことを気になる。科学的に考えると、放射線量も減り、外遊びもできるようになったが、大人世代は放射線教育をちゃんと受けているわけではなく、色んな報道もされているし、何が正しくて何が間違っているのかということを100%の形で言うことは難しい。やっぱり慎重に考えたほうがいいし、不安は消えないし、周囲から神経質だというふうに思われるなど、周りの目も気になるしで、本音を話せない。家族を避難させているお父さんも、そのことを会社で公にできない、話せないと感じている。

東日本・家族応援プロジェクトの福島は、一年目、福島県中央児童相談所との連携で開催、私は二本松から参加した。もともとNPOで子ども支援や家族支援、こころの相談に取り組み、仮設住宅に継続支援のプロジェクトを立ちあげ、避難している土地にボランティアを入れるプロジェクトを作っているところだった。二本松では、子育て支援グループのココロさん、ボランティアグループのヒラソルさん、私どもビーンズ福島が協力して実施した。ちょうど二本松の仮設住宅で子どもの学習支援、遊び支援をやったので、荒木先生や院生の皆さんに来て頂き、ご参加頂いた。子どもたちにとっては楽しい時間だったと思う。

二本松の2年目では、3階の一番きれいなスペースで漫画展をすることができた。その年の福島では、村本先生たちにお越し頂き、定番になっているクリスマスカレンダーや、遊びのワークショップ、とくに人気があるのがカプラ。木製のブロックで、東京おもちゃ美術館から寄贈頂いたということだが、いろんな造形ができるし、工夫もできるということで、私たちも自分たちでカプラを集め、使っている。

2013年の二本松では、浪江町から避難して浪江町で事業再開された方にも参加頂き、活動の中身が広がったかなと思った。他のところではないだろうというのが、福島県産の野菜の放射線を測って、親子で福島の食材を使ってピザ作りをしようという取り組みだった。去年の二本松では、荒木先生が障がいを持っているお子さんのお母さんたちを交えてのお話など実施したが、なかなか専門的な観点から見てもらうことができていないので、ちょっと安心

したというお母さんもあった。ただ、二本松は、他にもいろんなワークショップを展開したりして、その規模で持続するのは大変ということがあって、今年どうしようかなという状況になっている。

福島の方では、昨年から子どもの夢を育む施設コムコムという市の施設の協力を得られるようになり、参加者も増えた。先週は、福島で遊びのコーナーを作ったり、団先生の漫画展が展示されたり、新聞にも色々掲載された。連携の現状としては、このプロジェクトをきっかけにつながるところがあった。一回つながると、家族応援プロジェクト以外のところでも協力体制ができてきている。

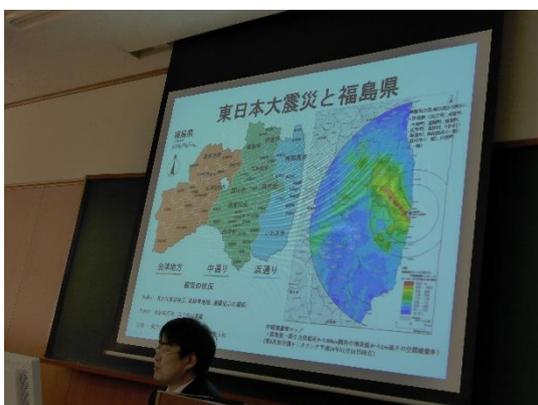
成果というところで、十年間続けると言っていることが、今になってその覚悟や重みがわかってきている。福島は、復興の歩みとして非常に遅れているが、世間というか日本全体としての見る目は、もう終わっているんじゃないのという声が聞こえてきたりするなかで、十年間寄り添うよというのは、すごく心強い。建物が建ったとか、除染が終わっただけではすまない問題がある。そこを埋めたり寄り添って頂き、わかっているだけというだけでも実はすごく心強い。

このプロジェクト、すごくありがたいが、位置づけとしては支援全体の中ではワンポイントリリーフ的。福島の支援というのは、今も現場の支援が日常の中である。その中でちょっとしたワンポイントリリーフで外の空気を入れてくださる。その中で見方が変わったり、自分たちが日々の生活の中で気づいていなかったことを気づかせてくれたりというところで、ちょっと変

化が起こったり、風が吹いたり、そういうところが家族応援プロジェクトのいいところ。一週間来て頂くなかで何かが劇的に変化するというわけではないが、でも、ちょっとでもそこから何かやってみようだったりとか、ちょっと考えてみようだったりとか、そんなことが生まれるというのがいいことなんだろうと思う。

課題は課題でいっぱいある。福島の場合、毎年、実施体制が少しずつ変わっているの、なかなか安定しないところがあって、来年にどうつないで、より発展させていくのかというところは一つの課題だと思っている。

フィールドワーク等で院生や修了生の皆さんにお越し頂いているが、一時的でなく、引き続き、例えばサービスマーケティング的な視点での関わりができるのであれば、もうちょっと受け入れ態勢を整えたいと思っている。ボランティアや継続している人が少しずつ減ってきているので、そこを学ぶ力にしていってもらえるといいかなと思う。私たちの方でも、復興の過程もまだ道半ば、でももう5年なんだよなというところで、これからもお互いにいい形での連携が続くようにと思っている。



## まとめ

京都と各地をつなぐ、線にするということをやってきたが、折り返し地点で、それぞれが一堂に会して面にしていく、歴史を積み重ねて立体化していくということを実現できて良かった。悩んだり学んだりしながら続けてきたなかで、継続のためには、日常の仕事の延長線上にプロジェクトがあることが一番自然だった。大学のプロジェクトとして教育に位置づけ、院生たちの半分は社会人でもあるが、ある種のミッションを持って地域に入り、さまざまなことを見聞し、関わるなかで、院生たちが殻を破り成長していく姿を5年間見てきた。1年目はよくわからなくても、2年目になるとよく見えるようになっていたり、卒後も参加してくれる修了生もいて、先輩後輩のつながりができ、教員含めて地域に育ててもらっていることにあらためて感謝する。

教員世代は阪神淡路を経験し、それぞれの体験があって今回がある。院生の中にも被災経験を持つ人々がいる。世代を超えて歴史をつなぐ、十年、二十年、三十年というタイムスパンで、途切れることなく知恵を交換しつないでいけたら、少しは賢明に生きていけるのではないかと期待したい。

東北には伝承の力が強く生きている。民話や伝承の活動をやっておられる方々が、高齢であるにも関わらず、元気に活躍なさっていて、大学よりもずっと質の高い実践を重ね、研鑽されている姿を見るにつけ、もっともっと京都の対人援助を学ぶ学生たち、教員自身もそこに学び、自らを鍛えていけたらと願ってやまない。

## 第二部 東日本・家族応援プロジェクト 2015 から見た被災地の今

午後の部は、例年行っている院生たちによる2015年度の各地での活動報告の後、現地からのゲストにコメントを頂き、全体でディスカッションした。2015年度の活動報告はすでに終わっている（周辺からの記憶19、21、22参照）、ここでは、ゲストから頂いたコメントとフロアからの声の概要を紹介する。



## 杉浦さんコメント

むつに来てくださったメンバーのお顔を見ながら発表を聞き、そんな風を感じてくれていたんだと嬉しかった。聞きながら考えていたが、支援者支援セミナーにおける院生の参加の仕方は違ってきている。

たとえば、同じ事例検討でも、去年はグループの外側からサポートしてもらったが、今年はファシリテーターとして、グループの中で役割を果たしてもらったことで、参加者の意見の出し方や反応が随分違った。院生がいてくれたということで、おじさん、おばさんたちが張り切ったと思う。いつも、メンバーの半分は民生児童委員、残りはさまざまな機関、自衛隊の相談室とか、教育関係、保健師さん、市の相談員、学校の先生などで、その肩書きを前にすると、民生委員さんたちはあまり話をされませんが、若い人を目の前に、普段言えないことも言えたのかなという感じがしている。それだけでも、院生の皆さんに盛り上げてもらった。

お父さん応援セミナーはむつでしかやっていないし、女人禁制なので、何をやっているのかわからないが、最初はすごくきつい顔をしてやってくるお父さんたちが、出てくる時には、肩組んでこれから飲みに行こうという感じで、すっかり打ち解けている。無邪気になって出てくる男たちの姿を見ていると、良い機会だと思う。ただ十年ということで、2020年までは保証されているが、その後どうなるのか、中村先生に後継者をつくってもらわないと困るなど思っている。

漫画トーク、漫画展は、去年から3週間

という設定になり、夏休みにかかるので、今まであまり目にしていなかった中学生や高校生の書き込みがちらほら出てきて、関心の層が広がってきていると感じている。広報について頑張っていることを評価して頂いたが、やはり知っている人が知っている人のお店に行って頼むという戦術が効果的。今年は始まる前と後の2回、新聞でも取り上げてもらった。随分知名度も上がったと思うが、それも、5年続けてきたこと、これから先も5年続くということが力になっていると思う。

## 國武さんコメント

東日本・家族応援プロジェクトを最初に市立図書館で開始したのは今から3年前の2013年度からで、毎年10月に開催している。詳細については、院生の方に丁寧に報告して頂き、ありがとうございました。プロジェクトの写真やエピソードは、何度見ても聴いても胸がいっぱいになる。

立命館大学の教授たちがお越しになると聞いて、最初は敷居が高く感じたが、実際にお会いすると全くそんなことを感じさせず、皆さんとても柔らかい空気をまとっていらっしゃった。3年目になり、「お久しぶりです、お元気でしたか」と再会の喜びを味わえることを本当に幸せに思う。東日本大震災があったから、こうやって皆さんとつながることができたとも思う。

大震災は、何十年もかけて築き上げてきたものをズタズタにした。災害は容赦なく人の命を奪い、人の心を傷つけ、ズタズタにした。今回、私は、被災者として震災の

生き証人になった。人生の中で災害に遭わないに越したことはないが、被災したことにより、こうしてたくさんの方々と出会い、感謝の気持ちを学ばせて頂いている。

何かしなければと思うことはできても、皆さんのように行動に転じて、遠くから来て頂くということは本当に尊いと思う。だから、来て頂いた皆さんに、支援して良かったと思ってもらえるよう、今後もこのプロジェクトが良い形で続いていくよう考えたい。限られた時間の中での一瞬の出会いかもしれないが、東日本家族応援プロジェクトを通じて、皆さんと出会えたこと、頂いた笑顔に心から感謝している。



## 阿部さんコメント

増田先生と愉快的仲間たちというフレーズで始まったこの取り組みは、最初は、プロのジャズのバンド、カルテッドが演奏しながら絵本の読み聞かせをするという形でスタートした。石巻には138カ所の仮設住宅があって、2万4000人くらいが避難して、仮設暮らしをしていた。小さいところは10世帯とか15世帯、町の中の三角型の小さい公園を潰して寄せ集めたような仮設、あるいは2000世帯の仮設で、仮設の診療所や病院や警察や郵便局があるようなエリアもあった。1年目、2年目と、どこへ連れていこうかと考えたが、おじいちゃん、おばあちゃんがたくさんいる場所、あるいは知的障がいを持つ人の施設を回った。

3年目からは立命館大学のプロジェクトとしておいでになるようになり、今年は、沿岸部にある震災にできた保育園と、海から500メートルぐらい中に入ったところの高齢者施設でやった。石巻での取り組みの特徴は、行政や特定のNPO団体さんとの関わりが全くない。私どもライオンズクラブが皆さんにアテンドして、いろんなところにお連れする。

この取り組みの素晴らしいところは2つある。ひとつは、大阪や京都、いろんなところから集まった学生さんたちが立命館大学という名のもとに被災地に来て、小さい子どもからお年寄りまでが和らげる時間を頂けること。もうひとつは、院生の皆さんが自分の大切な時間を使って遠くまでやって来て、被災地の現況を垣間見る。大川小学校の話もあったが、あんなふうに74名、先生たちも10名亡くなった場所に立

つと、戦慄感を覚える人もいるし、感じるものがたくさんある。毎年大学の取り組みを地域に網掛けをしながら、来てみなければわからなかったことを自分たちのものとして持ち帰ってもらっていること。

一番の宝は、ここに参加している院生の皆さんがこれから卒業されて、社会へ出て、地域でいろんな形でいろんな職業に携わられるとき、被災に対する考え方や、自分が体験しなかったことが起きたときに、その場に直面してどう対応するか、こうして学んだことがきっと将来役に立つだろうと願ってやまない。「来て頂いてありがとうございます」は、88%はそうだが、残りの12%は、皆さんもこの経験を糧にして、自分の人間力に置き換えて、自分にその力を残して欲しいと願っている。



## 鷺田さんコメント

社会福祉法人若竹会多機能事業所すきっぷで、障がいのある方の就労支援や日中活動の支援の方をしている。宮古市の状況も大分変わってきている。災害公営住宅ができたが、まだ仮設住宅、みなし仮設、住宅再建された方と、被災者もそれぞれ生活が変わっているというところも報告して頂いたが、毎年来て見てもらえたらと思う。今回プロジェクトに宮古の伝承を入れたが、歴史に深い地域であるということも活動を通して理解を深められたらと考えている。

聞きながら4年前を振り返り、また石巻の発表を見て、福祉の人間なのに自分自身のことしか考えられなかったというのがどこかにあったが、自分も同じような状況があったことを思い出した。利用者さんを連れて避難所に数日避難したが、暗い中で聴こえてくるラジオが「どこかで何人遺体で見つかりました」とかいうのを聞きながら、自分の家族や家の状況もわからないまま、利用者さんを見なければいけないというのはきつかったなというのがある。結局、自宅も流され、家族も震災関連死で亡くなった。結果的に仕事に救われた部分もあるが、時間が経って考えた時、自分は福祉の仕事をしていていいのかと悩んだこともあった。

それでも、やはり色々な方に助けて頂いて今があると感じている。電波が入るようになったのが一か月半ぐらいしてからだったが、携帯の電源を入れたときに、皆さんから心配のメールが数百件ワーッと入ってきて、こんな自分でも気にかけてくれ

ているんだというのを感じた。こうして京都から岩手のことを気にかけてくれる方がいるというのが、実はすごく大きいのかなと感じながら報告を聞いた。課題は多いが、また次に向けて取り組んでいけたらと思うので、よろしくお願いします。



## 中鉢さんコメント

皆さんの発表を聞かせて頂き、福島以外の状況がよくわかった。本当に多くの方が影響を受けたが、立ち上がって前に進もうとしているんだなということ、そこで色々な物語が起こっていることを思った。また、院生たちは、短時間であっても、本当に物

事を深く捉えているんだなと感じた。

現場で目の前のことに囚われていると、見えなくなったり気づかなかったりすることがある。そこを客観的な目で見たり、別の視点をもたらるのはすごくありがたかったと思う。私たちは、一方的に支援をしてあげるといのは本当の支援ではないと思っていて、人と人とのつながりや居場所、地域だったりすごく大事で、その中でエンパワメントを生み出していくというのを大事にしている。ただ、今、福島でも支援が現在進行形でまだ続いているというところで、支援って何だろうと見失いがちになることも結構ある。

先週、家族応援プロジェクトが終わった翌日、山形に避難されている福島の方を支援している方との会議があって、そこでも話したが、放射線に対しての評価が色々あるところで、支援の目的が本当に避難されている方の心情や生活に寄り添うことなのか、それとも自分たちの価値観を守るための支援なのかと思うところがある。また、支援のあり方というところで、傾聴だったり寄り添いだったりとかいうことが基本スタンスでも、だんだんそれがルーチンワークになっていたり、長期化するなかで支援者の中で見えなくなっているものがある。そういうところに変化を生み出すようなあり方が大事ではないか。

今回の福島でのプロジェクトでは、土日のところで、実は職員が結構来てくれていた。スタッフという形ではなく、ひとりの参加者としてきて欲しいということ伝えてあった。例えば民話のところに来ていた親子は、フリースクールの私の最初の生徒。成長して30ぐらいになるが、自分の経

験を活かして心理職になったが、パパになり、奥さんと子どもを連れて家族の顔で来てくれた。クリスマスカレンダーや遊びのコーナーにも、ママの顔でスタッフが結構来ていた。団先生の話のところにも、普段関わっている親の会や、不登校、引きこもりの方も結構参加していた。実は、スタッフも被災していたり、影響を受けている。つながったり癒されたりきっかけになればいいなと思っていた。

福島はまだまだ時間がかかる。変化を紡ぎ出すための問いかけや視点が足りていない。たとえば放射線被害と地域の復興にはモデルがない。生活再建においても、考え方がバラバラ、分断されるなかで、自ら考え、自ら決め、自ら歩む必要がある。日本全体の傾向として、それまでは成り行きでやってこれた部分、周りが決めてくれたりというところが多かったかもしれない。そういうことに向き合って決めるというのが一人ではなかなか難しい。そこに一緒に寄り添ったり、考えてくれたりというところで支援者の役割が今後必要だと思う。

きっかけをつくるというところで、家族応援プロジェクトや立命館の皆さんとの関わりが非常に大きかったと思うし、これからも引き続き関わっていただけたらと思う。福島では、支援者がまだまだ不足している。短期でも、卒後に被災地で実地研修も兼ねて、仕事として1~2年やってみたいなんて方がいらっしゃれば、募集がたくさんあるので、そんなところでも関わって頂けるとありがたい。



## フロアからのコメント

院生の発表や現地関係者のコメントにフロアからたくさんの発言があった。ここでは、一部を要約して報告する。まず、フロアには、被災地出身の学生たちが来てくれていたようだ。お二人が発言してくれた。

「実は、私は、被災地の出身。震災当初、全国各地からたくさんの支援を受けて、すごくありがたかった。1回とか2回、数回のボランティアもありがたいが、やはり長期間にわたって支援して下さるということはすごいことだと思う。今回のプロジェクトが十年間やって下さるということで、本当にすごいことだと思うし、すごくありがたい気持ちでいっぱい。今日このシンポジウムに勇気を持って参加して良かった」。

「私は福島出身で、色々発信があるのを何度も見ていたが、どうしても感情が高ぶって来れなかった。今日は勇気を持ってきた。家族のお葬式があつて、関西に帰ってきて1週間ぐらいして地震が起きた。ニ

ュースを見て怖くなって、帰れなくなってしまっていた。

でも、ここの先輩方は、こんなに遠いのに、思いを持って福島や遠くに行かれていて、すごく嬉しい気持ちと同時に、罪悪感、やるせなさを感じた。自分も支援職につきたいと思っているので、本当の支援ってどんなことなんだろうとあらためて考え、学びの多い一日になった」。

関西にも一定程度、被災者出身の人々がいるだろう。今回、肯定的なフィードバック頂いたことをありがたく思うと同時に、声をあげないところでも、さまざまな発信に何かを感じている人々があることを忘れないでおきたい。

一般の参加者からの発言もあった。

「京都で在宅支援の仕事をしている。聞いていて、大きな災害があった時、受けた衝撃が、悲しいとか辛いとかでなく、助かった人たちが助かってしまったとまで思わせてしまうのだと知った。

そんな負の産物に対して、抱きしめられたりとかいう手当で治るようなものではなく、皆さんが活動されているように、細く長く寄り添うということで、その産物が変化して行って、また寄り添った人たちに返っていくんだな、すごく素晴らしいものなんだなと思った。

証人になるということで、証人になった人が違うものをもらい、キャッチボールのように返していく。団先生の木陰の物語は逆証人というか、結局皆さん同じことをされているんだなと思った」。

それから、プロジェクトメンバーである院生や修了生たちの声である。それぞれの物語が語られ、被災地に行き、現地の人々と関わるなかで受け取ったものの影響を再確認し、率直に表現してくれた。

「東日本・家族応援プロジェクトに関わる院生やスタッフそれぞれに、それまでの人生があって、それぞれの思いがある。自分自身は、今回、東北に行かせてもらって、いろいろあってやめていたバイオリンを弾き、現地の方にすごく喜んでもらって、初めてありがとうという言葉の重みを知った。

それをきっかけに、疎遠になっていた親との関係を修復することができ、先生方やお世話になった人々に本当にありがとうと思った。

だから家族応援プロジェクトは、僕の中では、被災地だけではなく、自分の人生の点と点を結ぶすごいプロジェクトになった。今後仕事をしていく上でも、こんなふうに互いに影響を与え合って良い方向に変わっていったらいいなとジーンとなりながら話を聴いた」。

「震災当時、私は高3で、修学旅行で東京に行って、帰った瞬間に揺れたのを覚えている。心の中で、ちょうど帰ってこれてよかったと思っていた。

今回、被災地に行き、自分の浅はかさを思い、もっともっと自分にできることを探さないといけないと思った。来年もまた参加して、地元の方に寄り添いながら自分にできることをもっと深く探していきたいと思う」。

「今回のプロジェクトに参加して、被災地のことも大きかったが、それだけに留まらず、プロジェクトを通して、自分の生まれ育った故郷のことを身近に感じ、自分を今まで育て、支えてきてくれた人たちに感謝したいという気持ちが育まれたような気がする」。

「自分が一番学んだなという点は、十年間続けるということが生み出す豊かさだった。熱しやすく冷めやすい支援ではなく、十年やると決め、腰を据えて取り組んでいくと、気持ちに余裕が生まれたり、家族の話が出てきたりとかいうのがすごく印象的で、今後参考にしたいスタンスを学べたと思う」。

「震災があってから、一度も被災地を訪れたことがなかった。今回参加させて頂き、もっと早く行けば良かったという後悔と、人と人とのつながりがこんなにも温かいのかと感じた。時間が私たちの人生に豊かな経験をくれたことを身にしみて感じた。

自分に何ができるのか疑問に思っていたが、小さなことでいいし、関心を持ち続けていくことが大事なのではないかと思う。また、自身が得た経験をアウトプットしていくことも大事なんだと思う。周囲に伝えても行きたい」。

二回目以上の参加者のコメントにも考えさせられる。

「今年で2年目の参加ということで、昨年からの変化や、人々との再会ということで、1年目とは違う参加の仕方になった。

今日は、自分たちがどういう気持ちで現地に行って、何をして、そこでどういうことを感じ学んだのかということを知って、そのフィードバックを受けたことがすごく大事なことだったと思う」。

「2年目行ってみて、ようやくこのプロジェクトの全容と、その地のことが知れたというのが正直なところ。去年は先輩方が現地のスタッフと再会を喜ぶ姿に、こういつながりができるのかと目の当たりにして、私も絶対来年行こうと思い、実際、再会って本当にこんなに嬉しいものなのかと実感した。就労したあとも是非参加したい」。

「震災が起きた時、中学校で教師をしていた。その年に福島の人と偶然お会いして、お話を聞き、授業で扱った。教職を辞めて大学院に入学し、プロジェクトに参加した。

1年目には何をしているのか全くわからなかったが、2年目にやっと、その過程のひとつひとつに意味が分かってきた。2年目にインタビューを希望した時、聞きたい項目を村本先生見てもらい、自分は被災者の人たちの思いをただ知りたいだけだったとつくづく感じ、何回も何回もインタビュー概要を先生とやり取りして、団先生と村本先生と一緒に話を聞かせて頂いたことがすごく印象に残っている。

今後、私が対人援助する活動を具体的にどう実践していったらいいのか、このプロジェクトが教えてくれたと実感している」。

「プロジェクト2年目になって、やっとプロジェクトの姿が理解できたかなと思う。

自分との関係もやっと少しずつ見え始めたかなというところ。同僚の言語聴覚士が福島のプロジェクトに関わり、京都で障がい者にひまわりを育てる作業をしてもらっているが、障がい者が自分の新しい役割を楽しんで生き生きやっていたと言っていたことを思い出した。

自分も新しく関わることがあったらなと思っている。また、障がい者の避難、福祉避難所の現状などについてもっと知りたい」。

「修士生で、3年間、2ヶ所に行ってきた。今回のみなさんの話を聞く中で、このプロジェクトの核や全体像の理解が少し深まった気がする。

自分は理学療法士として働いているが、自分にできることとできないことをわかったうえで、何を選ぶのが大事だと思っている。プロジェクトにおいても同様だった。今後も自分なりにできることは何なのか考えながらやっていきたい」。

「2012年に入学してから、ほとんどの地域に参加している。そもそも大学院に入るきっかけになったのが震災プロジェクトのHPを見て、よくわからないが、十年やりますと書いてあるところに共感した。

実質的に4年目の活動に参加し、何かに対して何かをするというわかりやすさや、全ての人にそれが適用できるのか、問題がなければ何もしないのかというところに疑問を持っていたことを振り返っていた。

2011年、友人に連絡を取って何かしようと思ったが、迷惑になるかもしれないとやめた経緯があり、活動ができるタイミング

や巡り合わせもあると感じている。

今回東北からみなさんに来て頂いて、お話を聞く中で、コミュニティの変化やプログラムが増えたり変わっていく様子、参加者の変化を考えていると、コミュニティやネットワークが広がったり、変化したりするなかで、プロジェクトやプログラムを一生懸命作ってくれる人たちの力を知ることになった。

院生の報告を聞きながら、活動を通して自分らが感じたことや、どういう学びになっているかを振り返ることがとても大事だと思ったし、各地の違いを再度共有しあうことで大事な学びになり、仕事や研究にも活かしていけると思った」。

「修了生で、普段は地域づくりをしているNPOを支援するセンターで働いている。私たちも2011年から立命館大学や先生方と連携して、プロジェクトを一部支援させて頂いている。京都でもまだ700名ほど避難されていらっしゃる方がいて、その支援にも取り組んでおり、今日のお話から参考になるものをたくさん頂いた。

院生の皆さんがこんなふうチームになって、現地へ赴き、多くの支援者の方々の姿を見ながら取り組まれているのはすごいことだなと思う。私たちの時代にはなかったもので、恵まれた環境であるなど羨ましくも思った。今日は修了生もたくさん来られていて、東北にモデルとなる支援者の方々の姿もあって、それを間近で見ているということもぜひ今後の学びに活かして頂きたい」。

## ゲストからのフィードバック

最後にゲストの方々から再度、感想を頂いた。最初に杉浦さんから、「先ほどの団先生の漫画、フェイドアウト、何回も繰り返し見ているものですが、今日この場でみなさんのお話を聞いて、もう一度あの漫画を見て、ドキュンときた。最初にむつで漫画展をと言ったとき、被災地をととても身近に感じていた。被災地に一番に救援に飛んでいった海上自衛隊の基地があるということ、原発銀座と言われるぐらい原発施設がたくさんあることを話した。

果たして自分たちは、まだ身近に感じているか。最初の頃は、とても身近なことと感じて地域でも話していたが、今日院生の方が色々調べて話して下さったこと、あのことを今、地域ではほとんど口にしない。いろんな関係や立場があって話題にしないということもあるが、ああやって一生懸命やってくれている成果を地元で発表する機会があったら、忘れない、遠くのものにしないという機会になるのかなど。年に1回のそういう機会が持てたらと思った。

今日は被災地の本当の今の現状を聞かせて頂く機会を与えて頂き、本当にありがとうございました」との感想を頂いた。

次に中鉢さんから、「十年と言いながら五年があつという間。また来てもらうなかで、色々な変化を感じ取って頂けるだろうと思いつつ聞いていた。私もずっと現場にい続けるし、これから先も、震災を語っていく。自分の生き方に何かしらに色濃く残っていくものだろうと思う。

どうしても放射線の問題を広く語るといようなことは福島でもやりづらい。で

も、こういう機会だったり、福島のことをわかって寄り添ってくださっていると、皆さんしゃべりだしたりする。こういう取り組みは引き続き大事だと思うし、是非これからも一緒に考えていく機会を持って頂けたらと思う」。

安倍さんより、「震災があった年、3月29日に携帯電話に東京から着信があり、電話に出たら国際NGOで、今、ドイツからマレーシアまで救援部隊が来ているが、福島の関係で日本に入れれないと言う。そういった人たちとつながってやってきたが、その団体が言った言葉をいつも思い出す。

5年間、私たちはここで活動しますと言われて、最初、僕は5ヶ月と勘違いをした。これだけひどい広大な災害であれば海外のいろんな状況を見ても、復興するための移行期に移るまでに最低5年はかかるとおっしゃった。その団体はこの11月で業務を終了し、後のNP0に引き継いで、海外の他の災害地に飛んでいった。帰りにおっしゃったのが、これからの5年は、緊急災害期からの復興の期間をいくらかでも早めるために、地域の皆さんが変わらなければいけないけれども、地域だけでは足りないし、私たちも一生懸命応援するけれども、とにかく人の心を大切に、被災したという人たちの心が和らぐようにケアしてあげてくださいと言われて帰った。国では復興期間5年が終わり、東京オリンピックに向けて云々という話だが、被災地の現況は、最低でも十年しないと、人々が安寧な生活を送る場所にならない。そういった意味で、立命館大学の皆さんも引き続き、いろんな形で支援の心や手当をお願いします」。

鷺田さんより、「正直、自分の地域でやっていることしか知らなかったというところもあり、他県の皆さんがこうした取り組みをされていること、院生の方々の報告を聞いて、本当に勉強になった。残り5年でどう活かしていくかを大事にしていきたい。

2年前にアクティビティ開発センターさんから連絡があって、そこからどんどんつながりが広がって、距離は遠いかもしれないが、つながっているという感覚を今回、すごく感じた。

来てくださった院生たちとの個人的関わりも増え、同業の院生たちともつながりができた。ひとつのことをきっかけに、それがどんどん、どんどん広がっていく。来年お会いできる時に、また少しでも変わったところとか、広がりを持たせたプロジェクトを展開できればと思う」。

國武さんより、「先ほども申し上げたが、保育園の写真とかエピソードは何度見ても聞いても胸がいっぱいになる。私は乳飲み子を抱えての被災で不自由ですごく辛かったこととかがすごく思い出される。風化させないように思っている、日々の生活に追われて自分自身も忘れていた時間の方が多いは事実。このプロジェクトで、あの時の辛さや過酷さを思い起こすことの大切さに戻る、そんな意味もあるのではないのかなと思う。また来年お会いできるのを楽しみに」。とのコメントを頂いた。

関係者が一堂に会してプロジェクトの成果を共有できるとても有意義な折り返し地点でのシンポジウムだった。

つづく